

松本市地域づくり市民委員会
第4期委員会レポート

令和 2年 1月27日

目 次

はじめに.....	1
テーマ1「地域づくり推進体制について」.....	2
1 参加のきっかけづくり.....	2
(1) 参加のきっかけづくりに欠かせない「楽しさ」.....	2
(2) 女性など多様な人のアイデアを生かし実現するための体制.....	4
(3) 緩やかな協議体を生かして解決に取り組む.....	5
2 ニーズの変化に対応できる地域組織の運営.....	6
(1) ニーズの変化に対応できていない理由.....	6
(2) 対策.....	6
(3) 各町会が上記の対策を進めるために必要な支援.....	8
テーマ2「地域と市民活動団体の協働について」.....	10
1 インターフェイス（接点）の改善（情報が伝わっていない）.....	10
(1) 公開情報の整理.....	11
(2) コーディネーターの必要性.....	11
(3) つながるための窓口ときっかけの場づくりの必要性.....	11
2 人と人を繋げる仕組み.....	11
(1) 地域運営に女性が関わること.....	12
(2) 様々な人が地域運営に関わること.....	12
3 信頼関係構築の仕組み.....	12
(1) 協働開始後のフォローアップ体制.....	12
(2) 経済的コストに対する支援.....	12
(3) 3つの視点に基づくコーディネート仕組み.....	13
参考資料.....	14
資料1 地域づくり推進体制に関するロジックツリー.....	14
資料2 地区・町会での取組事例集.....	16
資料3 地域と市民活動団体との協働に係る論点整理.....	18
資料4 第4期委員会開催経過.....	19
資料5 第4期委員会委員名簿.....	20

はじめに

松本市地域づくり市民委員会は、本市にふさわしい地域づくりを推進するために、平成23年に設置されました。これまでの第1期から第3期までの委員会では、「松本市地域づくり実行計画」（平成24年度～28年度）及び「第2次同計画」（平成29年度～令和3年度）の策定に向けた提言をはじめとして、地域づくりの課題とその解決方法について話し合ってきました。

第4期委員会（任期 平成30年2月1日～令和2年1月31日）では、人口減少・少子高齢化による地域の担い手不足が大きな課題となっている中で、「地域づくり推進体制」と「地域と市民活動団体の協働」という2つのテーマについて検討しました。

「地域づくり推進体制」については、「ワールド・カフェ」（注1）や「ロジックツリー」（注2）という手法を活用し、また市の地域づくりセンター長からのヒアリングなどを行いながら議論を重ねました。

また、「地域と市民活動団体（注3）の協働」については、同じテーマについて検討している第6期松本市市民活動推進委員会（注4）と合同での意見交換を行いました。

そのような新しい試みを取り入れて検討する中から見えてきた、地域づくりの実践におけるポイントを、レポートにまとめました。第4期委員会の活動の成果である本レポートが、地域づくりの現場で様々な課題に取り組む地区・町会役員や行政関係者の皆さんの参考となれば幸いです。

松本市地域づくり市民委員会
委員長 廣瀬 豊

注1 ワールド・カフェは、会議での討論手法の一つで、カフェでくつろいでいるようなリラックスした雰囲気で行います。参加者は4～5人ずつに分かれてテーブルごとに対話し、一定時間が過ぎたら、テーブルのメンバーを入れ替え、対話することを繰り返し行います。

注2 ロジックツリーは、思考整理の手法のひとつで、ある問題に対し、どのような道筋でその事象を解決するのが適切なのか探るためのものです。問題を漏れやダブリがないようツリー状に分解し、論理的に原因や解決法を探します。

注3 本稿では、地区や町会などの地縁型組織に対し、NPOなどの志縁型組織のことを「市民活動団体」といいます。なお、「市民活動と協働を推進するための基本指針」では、「市民活動とは、市民の自由な意思による主体的な非営利活動をいいます。」としており、地縁型組織も含む最広義の定義付けを行っています。

注4 市民活動推進委員会は、「市民活動と協働を推進するための基本指針」に基づき、具体的な施策や取組みについて検討・評価をし、協働によるまちづくりの推進と市民活動の促進を図るため、平成18年に設置されました。現在は第6期で、任期は平成30年3月22日から令和2年3月21日までです。

テーマ1 「地域づくり推進体制について」

地域づくりを推進していくためにはどうすればよいか。

第4期市民委員会では、最初に「どうする？松本市の地域づくり」をテーマに「ワールド・カフェ」により意見交換を行いました。その結果、地区や町会の行事に参加する人が減少することで、お互いの困りごとや地域の困りごとを話す機会も減り、地域に関心が向かなくなってきたことを再確認しました。

常日頃からの身近な人との関わりは、災害時に大きな力となり被害を最小限に食い止め、その後の復興にもつながります。地域づくりを推進するには、やはり身近な人間関係における支え合いが基本になると考えられます。

そのためには、住民がお互いに顔を合わせる機会を増やし交流できるようにするための「参加のきっかけづくり」と、町会などの地域組織が住民にとって必要な存在であり続けるための「ニーズの変化に対応できる地域組織の運営」という2つのテーマが重要と考え、話し合いを行ってきました。



▲委員会での話し合いの様子

1 参加のきっかけづくり

身近な人（近くで生活をしている人）との関わりが、「安心して、生き生きと暮らせる住みよい地域」について具体的に考えるきっかけとなり、地域づくりに対する考え方（価値観）に影響するものと考えます。地域の災害対策などについても、知らない誰かのことをではなく、今いる地域の人の顔を思い浮かべることで、具体的な困りごとが見え、何をしたらよいか思い付くことがあります。

そこで、地域（地区町会連合会や町会）の行事（活動）への参加について、まずは住民一人ひとりが行事に参加し、身近な人間関係を構築することが大切と考え、そのための仕掛けを検討してきました。

➤ 資料1 ロジックツリー「参加のきっかけづくり」……………P. 14

(1) 参加のきっかけづくりに欠かせない「楽しさ」

地域の行事は、「やらなければならない」ものが多く、役員や担当者が例年義務的にこなしているものも多々あります。一方、役員や担当者の任期は、通常1年又は2年であり、かつ町会や隣組を代表して選出されることから長年携わっている人は少ないため、前例踏襲になりやすく新しい内容が入り込むことが困難です。そのようなマンネリ化した状態では、楽しさが感じられず、進んで

参加する人もいないため、ますます負担感が増えてしまいます。

ここでは、参加のきっかけづくりに欠かせない「楽しさ」に関し、3つのポイントを示します。

ア 参加者が楽しく参加できる工夫

まずは、参加した人が楽しかった（楽しそう）と感じるような活動内容を心掛けることが大切ですが、人々の価値観が多様化した現在では、人それぞれ「楽しさ」の感じ方は違います。その多様な価値観に働きかける仕掛けが必要となります。

そのためには、参加を呼び掛ける対象を具体的にイメージして企画することが大切です（世代、子ども、高齢者、女性、男性、自営、サラリーマンなど）。



▲たがわバンド AUBE の演奏風景(事例1)

➤ 事例1 ターゲットを絞った様々なイベントの開催（田川地区）……………P. 16

イ 企画に関わる人も楽しく企画できる環境

過去の企画をそのまま踏襲するだけでは、「使命感」だけで「楽しさ」は生まれません。企画に関わる人が、これまでの経験や知識、特性を生かしたアイデアを提案し、それを企画に取り入れることができる環境が必要です。

企画することが楽しかったり、自分のアイデアが企画に取り入れられたりすれば、新たに企画に関わろうとする人も増え、行事そのものの参加者も増えていくのではないのでしょうか。

また、子どもも企画に参加したり、役割を担って参加したりすることで、責任感を持って行動することにつながり、地域の大人との接点ができるというメリットもあります。

➤ 事例2 VS 芳川マッチ(芳川地区)……………P. 16

ウ 参加できなかった人にも伝わる楽しい情報

参加できなかった人にも、当日の様子や楽しさが伝わるような情報発信を心掛けることも有効です。次の機会への期待とともに、その情報を基に地域内のコミュニケーションが図られます。

情報技術の発達により SNS などの新しい媒体も生まれていますが、全ての人に受け入れられる共通の媒体はありません。そのため、情報発信する相手に合わせ、効果的な媒体を選んで活用することが大切です。

なお、SNS は、楽しい活動であれば参加した人が自ら情報を発信し、その人のつながりで拡散する効果もあります。

- 事例3 地区の歴史を漫画で学ぶパンフレットなどの作成(第三地区).....P. 17

(2) 女性など多様な人のアイデアを生かし実現するための体制

ア 女性のアイデアの活用

これまでの町会運営や行事の企画は、男性中心でした。女性のアイデアを取り入れ、女性同士のネットワークを生かすことにより、共感と呼び行事に参加する女性も増えると考えられます。女性が参加しやすい環境を整えていく必要があります。

例えば、夜7時から始まる会議は、夕食の準備や片付けなど家事と重なる時間帯であり、参加をためらう人もいます。参加しやすい時間帯を考えるきっかけとなるのは、生活に密着した女性の視点で考えることも環境を整えていくきっかけとなります。

- 事例4 女性を町会役員に(四賀地区 七嵐町会).....P. 17

イ 新しいアイデアの積極的な採用

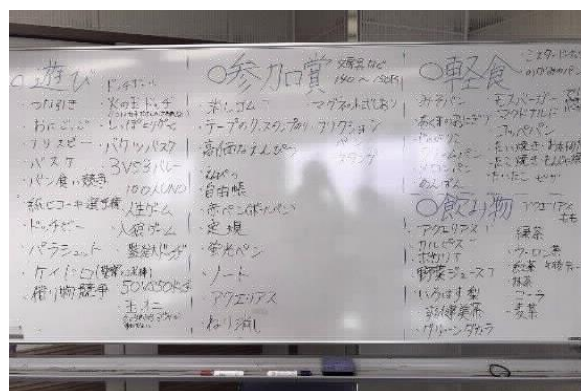
新たなアイデアは、これまでとは違うアプローチの発見につながります。さらには、新しい人、学校関係、市民活動団体とのネットワークによって活動が展開され、結果的に地域の活動に関わる人が増えることにもつながります。

- 事例1 ターゲットを絞った様々なイベントの開催(田川地区).....P. 16
- 事例2 VS 芳川マッチ(芳川地区).....P. 16
- 事例4 女性を町会役員に(四賀地区 七嵐町会).....P. 17

ウ 子どもを巻き込む

子どもが参加できる行事は、親も一緒に関わるきっかけとなります。親が地域と関わる姿を見たり、子ども時代に地域と関わったりすることは、将来の地域と関わる考え方に影響します。

また、松本版コミュニティスクール事業など学校と地域を結ぶネットワークの構築が進められていますが、それをより効果的に活用することにもつながります。



▲VS 芳川マッチ こども会議の記録(事例2)



▲VS 芳川マッチ 当日のレクリエーションの様子

- 事例2 VS 芳川マッチ(芳川地区).....P. 16
- 事例3 地区の歴史を漫画で学ぶパンフレットなどの作成(第三地区).....P. 17

(3) 緩やかな協議体を生かして解決に取り組む

各地区で効果の上がっている実践の事例を検討した結果、共通する特徴として、緩やかな協議体が生かされ、うまく機能していることがわかりました。

緩やかな協議体は、あらゆる立場の住民や様々な活動をしている団体が参加し、地域の課題について学び話し合い、解決に向けて取り組むための仕組みです。町会活動への住民参加を促進するという課題についても、緩やかな協議体で話し合いをすることが有効と考えられます。役員や各組織の代表による話し合いだけではなく、課題によって役員以外にも門戸を広げ多くの住民が参加できる話し合いの場が理想です。この課題は、簡単に解決するものではありませんが、幅広い住民が自由に意見を出すことができる場で話し合うことにより、解決に向けたアイデアが生まれ、それを実現するためのアイデアも生まれるのではないのでしょうか。

さらに、実施した後はイベント内容の反省だけではなく、「住民参加の促進」という課題に対して振り返りを行うことで、実施時に気付いたヒントを次の機会に生かすことができます。また、まちづくりや地域活動に精通した市民活動団体や大学の研究者などに参加してもらい、客観的な評価を得ることで、「住民参加の促進」に向けた段階的な取り組みにつなげることができます。



▲地区の歴史を漫画で学ぶパンフレットとイラストマップ(事例3)

- 事例1 ターゲットを絞った様々なイベントの開催(田川地区).....P. 16

- 事例2 VS 芳川マッチ(芳川地区).....P. 16
- 事例3 地区の歴史を漫画で学ぶパンフレットなどの作成(第三地区).....P. 17

2 ニーズの変化に対応できる地域組織の運営

本市における地域づくりの基本理念として、「日常生活圏である地区を単位として、既存の自治の仕組みを生かし町会と市との協働を基本としながら進めること」が掲げられています。しかし、少子高齢化に伴う人口減少と高齢世帯や単身世帯の増加により、役員を担う人材が減少し、これまでの町会組織のままでは、運営できなくなることも想定されます。加えて、町会は、住民ニーズに対応できる組織として期待される存在ですが、例年通りの活動を継続することにとどまっている現状があります。

本委員会では、社会や地域の変化、住民ニーズの変化に対応し安心して暮らせる地域にするために、いずれ町会組織の大幅な改革(組織の改編や人員の再構成、町会の合併など)が必要となる可能性も踏まえ、地域組織の運営について議論を重ねてきました。

- 資料1 ロジックツリー「ニーズの変化に対応できる地域組織の運営」.....P. 15

(1) ニーズの変化に対応できていない理由

なぜ地域組織が住民ニーズの変化に対応できないのか考えた結果、次のような理由が挙げられました。

ア ニーズを把握する力が弱いから

イ 住民が地域へ求めるニーズは潜在的であり、住民自身が自覚していないから

ウ そもそも地域の組織がニーズに対応する組織だという認識がないから

エ 現在の地域で担う仕事が多くニーズに対応する取組みを新たに始められないから

つまり、住民はニーズの解決を地域組織に求めるという意識が薄く、それを求めたとしても、地域組織も住民ニーズに応える余裕がないのが実情です。

(2) 対策

ア 地域のニーズを把握するために

地域組織で取り組むニーズか否かにかかわらず、一人ひとりが感じているニーズを気軽に話し合うことで、地域のニーズが浮かび上がり、認識されるようになると思います。そのために、地域の住民同士や組織同士によるコミュニケーションが進むよう、なるべく多くの機会を作ったり、運営方法を工

夫したりすることが大切です（公民館やサロン、居酒屋カフェ、まちづくり協議会など様々な場を活用して）。

特別な機会を作らなくても、自然にコミュニケーションがとれる仕掛けがあれば、なお良いでしょう。

イ ニーズを顕在化するために

地域住民が気付いていないニーズは、第三者が地域の状況を見える化して提示したり、地区公民館や町内公民館で地域の課題を学んだりする機会を作るなど、住民自身の気づきを促すことが重要です。ここでいう第三者とは、行政職員（異動により地域づくりセンター勤務となれば、市全体を俯瞰しつつその地区の状況を客観的にとらえる力が期待される）だけではなく、大学、NPO法人など、地域を客観的にとらえることができる外部の専門家のことです。そのような専門家の力を活用することも効果的です。

また、住民自身が気づきを得るには、十分な情報が伝わっていることが前提となります。地域には様々な世代の住民がいるので、情報発信は多様な情報ツールを活用するよう工夫することが大切です。そのような情報は、町会単独での作成は困難なので、行政や地区町会連合会などからの積極的な働きかけが必要です。

ウ 町会運営体制の見直しについて

せっかくニーズを把握しても、これに対応できなければ住民に信頼される地域組織にはなり得ません。ニーズに対応した取組みを行うためには、組織運営をより良く変えていくリーダーが不可欠です。そのためには、役員の任期や選出方法などを見直したり、能力がある人を男女関係なく登用できる体制に改めたりするなどの工夫をすることが重要です。

また、既存の組織を変えるだけではなく、新たなニーズに対応するチームを組織して、既存の組織がそれをバックアップする体制なども考えられます。

ニーズの顕在化と同様に、このような取組みについても、第三者の協力を得て行うことも効果的です。

さらに、単一町会ではニーズに対応することが困難なことも予測されますが、近隣の町会との連携や役割分担、地区町会連合会による調整など、町会内部だけで解決できないことを広域的に解決することも検討してははいかがでしょうか。

エ 役員の負担軽減について

町会組織は、誰もがやりたくないことを役員になった期間だけ負担し、それを一定期間で回して住民が均等に負担するための体制と認識されがちで

す。そのために世帯だけではなく、隣組といった町会の中でもさらに身近な集団で輪番制により役割分担をすることが多くなっています。かつては世帯数がある程度均等になるように決めた隣組ですが、現在では世帯数のばらつきが生じ、従来どおりの輪番制を続けることが困難な隣組もあります。

しかし、町会によっては、役員以外の住民が積極的に「楽しさ」を求めて主体的に活動している事例も少なくありません。これからの地域組織は、“役員ではない住民”が楽しさを見つけられる機会を積極的に作って地域活動を楽しめる担い手を発掘し、その人たちに一定の権限を与えて力を活用することで、地域ニーズに対応していくことが大切になってきます。

ただ、町会長など地域組織の役員の多くは、毎年行う地域の行事や行政からの依頼、地域内の様々な相談対応などに追われ、新たな担い手発掘の仕組みづくりにまでは手が回らないのが実情です。

そこで、任期を終えた役員が、役員の苦勞を知っている経験を生かし、過度な負担にならない程度に現役役員をサポートする体制を整えることで、役員の負担を軽減するとともに、役員になることのハードルを下げ、「楽しむ」工夫をする余裕を生み出すことにもつながるのではないかと考えます。

また、役員の業務量自体を減らすことも重要です。行政は、依頼事項の削減や、より負担の少ない依頼方法などを検討することが必要です。

(3) 各町会が上記の対策を進めるために必要な支援

(2)に掲げたような取組みを進め、ニーズに対応できるように組織の体制を改革していかなければなりません。任期の限られた役員がそれを実施することは非常に困難です。町会連合会（市・地区）や市が研修などにより各組織へ提案やアドバイス、情報提供などを行いながら、改革を後押ししていくことが求められます。

ア 地域づくりセンターに期待する役割

地域づくりセンターは各地区の地域づくりにおける最前線の拠点であり、支所・出張所（窓口サービス）、公民館（学習）、福祉ひろば（地域福祉）の機能が一体となり、住民主体の地域づくりを支援する行政機関です。2014年4月から35地区に設置され5年が経過しました。地域づくり活動の支援や地域課題の把握、各種相談対応に加え市担当課との調整機能を果たしているセンターの存在も評価されていますが、まだその役割が住民に理解されていない地区もあります。地域づくりセンターには、客観的に地区の状況を分析し積極的に情報提供することにより、住民が地域課題に気付き課題解決に動き出すことができるような支援をはじめ、より一層の地域づくりの拠点としての

役割を期待します。

加えて、広域的な視点を持った地域組織の運営改善に対する支援にも期待します。具体的には、担当地区だけでなく、隣り合わせる地区と連携して地域課題の解決を進めることや、地区の枠組みに捉われず、テーマごとにチームを編成して取り組むことなどが考えられます。

イ 地区別地域づくり計画への移行支援

第2次地域づくり実行計画では、地域課題解決に向けた取り組みの推進として「地区別地域づくり計画への移行支援」が挙げられています。これまで各地区で策定した地区別地域福祉計画をベースにして、地域福祉計画の見直しなどを行う際に、防災や交通などの地域課題に関する取り組みについても盛り込むことで、地域づくり計画へと移行させることになっています。移行の期間は設けられていませんが、これまでの計画を現状と比較検討し見直すことに加え、新たなニーズ（防災や交通などの地域課題）を話し合うことは、地区別地域づくり計画への移行につながり、住民が地域課題に気付くきっかけとなることが期待されます。計画を策定することよりも、地区別地域づくり計画への移行を通じて、緩やかな協議体で地区のことを話し合う場や住民間のつながりが生まれることが期待されます。

テーマ2 「地域と市民活動団体の協働について」

市民活動団体は、その性質上「目的や社会的意義が明確」、「専門性が高い」、「先駆的・開拓的取り組みが可能」、「柔軟で行動的・実践的」という特徴を持ち、住民のつながりや文化・歴史（前例や慣習なども）に重きを置く地域（注5）との違いがあります。そのため、地域課題の解決に取り組むという共通の目的があっても行動のための具体的な目的の共有化が行われず、現状ではうまく協働が進んでいません。超少子高齢型人口減少社会では、既存の自治の仕組みだけで地域課題の解決を図っていくことは困難な場合もあり、新たな解決の糸口として市民活動団体などとの連携や協働が模索されています。

「第2次松本市地域づくり実行計画」では、平成27年に策定した「市民活動と協働を推進するための基本方針」などに基づき、地域と市民活動団体との協働体制の構築を施策の一つとして定めています。本委員会では、それを踏まえて、「どうすれば、地域と市民活動団体の協働が進むのか」について話し合いを行ってきました。加えて、同じテーマについて検討している市民活動推進委員会と合同で意見交換を行い、本委員会として協働を進めるための3つのポイントを整理しました。

ただし、本来性質の違う市民活動団体と地域が必ず協働しなければならないというものではありません。協働すること自体が目的ではなく、地域課題の解決につながる手段として協働を捉え、両者が協働する目的を共有するような良質な出会いから継続的な関係に発展することが重要と考えています。



▲松本市市民活動推進委員会との意見交換の様子

➤ 資料3 「地域と市民活動団体に係る論点整理」……………P. 18

1 インターフェイス（接点）の改善（情報が伝わっていない）

地域と市民活動団体は、互いに異なる運営方法で活動をしているため、ほとんど接点がありません。また、協働して取り組まなくても、年単位で、ある程度の活動をしているため、お互いに協働に対する意識が低いのが現状です。

協働することの利点や解決に結びつくような事例の他、それぞれの「地区の状況」と「市民活動団体の活動内容」について、地域づくりセンターと市民活動サポートセンターが連携して情報提供する仕組みの構築を望みます。

(1) 公開情報の整理

市民活動サポートセンターのウェブサイトでの市民活動団体の紹介は、大項目として「活動の分野」があり、その先で各団体が紹介されますが、具体的な活動内容にたどり着くのは容易ではありません。分野と活動内容がつながるような情報提供が重要です（知り得た情報をどう使うか受け取る側が考えられるような情報提供）。

また、市民活動団体の検索ワードとして、地域課題解決につながるようなキーワードを組み入れることで、地域からの主体的なアプローチが期待できます。

(2) コーディネーターの必要性

市民活動団体は地域との関係性が弱く、町会等の地域団体とは性格が異なるため、その協働には双方を結びつけるコーディネーターが必要です。また、両者がそれぞれ年間計画を作る時点で調整を図るなど、コーディネーターがタイミングよく示唆することも重要です。

(3) つながるための窓口ときっかけの場づくりの必要性

市民活動団体にとって、地域はフィールド（活動の場）として理解されていますが、受動的に関わることが多く、能動的に関わることが少ないのが現状です。その原因の一つとして、地域に働きかけるための窓口（接点）が不明瞭であることが挙げられます。地域の側の窓口及び地域と関わることにつながるようなきっかけの場づくりが求められます。

具体的な例として、市民活動団体同士の交流の場は、お互いの活動を知り合い、その後のコラボレーションの機会創出に功を奏しているため、市民活動団体と地域役員との出会いの場などが挙げられます。

2 人と人を繋げる仕組み

地域と市民活動団体は、双方の知り合いがつながることで、協働が生まれています。特に、女性のネットワークが有効に活用されています。

知り合いのネットワークを大切にし、そのネットワークから他の市民活動団体や他の町会とのつながりを広げていくために、インターフェイスに市職員が積極的に関与する仕組みが求められます。例えば、市民活動サポートセンターや地域づくりセンターの職員が連携しながら、つながりを意識することで、人から人へのネットワークが広がります。

また、市民活動団体は女性が活躍している団体も多いですが、地域や町会組織では、まだ女性の活躍が少ない状況です。女性が活躍する地域や町会の方が、女性のネットワークにより協働が生まれやすいのではないのでしょうか。

(1) 地域運営に女性に関わること

女性が役員として町会や公民館に関わることで、参加者の拡大や活動内容の充実、市民活動団体との連携などがスムーズに行く事例が報告されています。これまでの町会運営は、世帯主中心の組織運営であるため、女性の参加に戸惑いがあったと思われます。しかしこれからは、世帯を代表する人だけではなく、世帯員一人ひとりが町会運営に携わり、個別性や多様性が認められる組織となることで、多くの人脈とつながり新たな試みに着手できます。女性の参加は、その第一歩であり、そのネットワークを活用した新たな協働に期待します。

(2) 様々な人が地域運営に関わること

女性の参加が地域運営に変革をもたらすように、様々な人が地域運営に関わることで、さらに多くの人とつながり協働が生まれます。例えば、子ども（小・中・高校生）や障害のある人、外国人、その地区のことを一緒に考えたいと考える人（市民活動団体や転居して住んでいなくてもその地域に愛着のある人）など、人と人とのつながりによるネットワークが期待できます。もちろん、全ての人が同じ条件で運営に携わる（権限を持つ）ことは困難ですが、何らかの形で携わることで、新たな協働につながっていくと考えます。

3 信頼関係構築の仕組み

地域と市民活動団体の両者が協働するためには、信頼関係の構築が重要です。両者が出会いつながることに加えて、活動しながら信頼関係を構築していく仕組み、つまり協働開始後のフォロー体制が弱いという現状があります。

(1) 協働開始後のフォローアップ体制

信頼関係の構築は、最初の出会ってから活動を進めていく中で構築されます。そのため、協働開始後のフォローアップ体制による信頼関係の構築を支援する仕組みが重要です。

地域と市民活動団体が協働を進めることになった場合、運営や組織の違いから軋轢が生じることがあります。この違いを意識して両者をつなぐコーディネートの仕組みが、市民活動サポートセンターと地域づくりセンター双方に必要となります。

(2) 経済的コストに対する支援

協働を進め、継続するためには、経済的コストに対する支援が不可欠です。町会活動や市民活動は、「無償ボランティア」というイメージがあるかもしれま

せんが、必要な経費が発生しています。こうした必要な経費に関して見て見ぬふりをするのは、事業の継続はもちろん、将来の関係構築にも影響すると考えられます。また、より専門性の高い事業や支援の場合は、無償のボランティアだけで進めることは困難です。

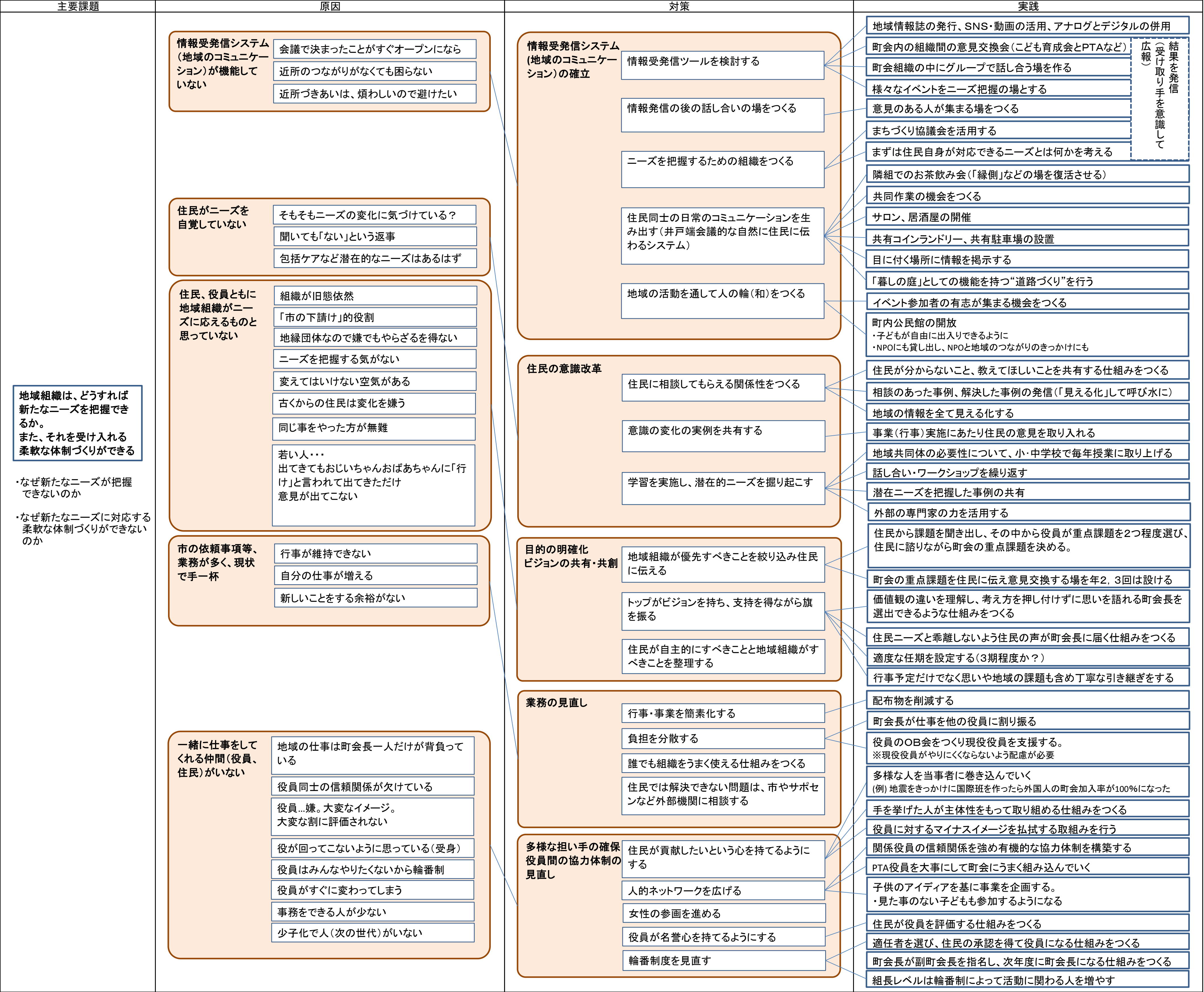
(3) 3つの視点に基づくコーディネート仕組み

これまで述べてきたように、地域と市民活動団体は、共通の目的のために協働して事業に取り組めますが、あくまでも両者は独立した組織であり、依存しあう関係ではありません。組織的にも財政的にも独立した対等な信頼関係に基づく事業展開が望まれます。

それを可能とするためには、目的を達成するための事業をとらえる全体的視点、それぞれの団体の事情をとらえる個別的視点、そして将来を見据える未来的視点という、3つの視点に基づくコーディネートの仕組みが必要です。

注5 本項でいう「地域」とは、町会・町内公民館や町会連合会などの地縁に基づく団体や組織のことです。

2 ニーズの変化に対応できる地域組織の運営



■補足事項、その他の話題

- 1 潜在ニーズの掘り起こしについて
- ・現在地区に暮している住民のニーズ、将来の住民のニーズ、世の中のニーズは、それぞれ異なり、常に変化していく。
- ・意識を変えるには、認知科学、心理学、システム思考などの知識も必要
- ・したがって、住民自身の視点による潜在ニーズの掘り起こしには限界がある。
- ⇒外部の専門家のノウハウを活用する必要性
(コミュニティ・デザインなど)
- 2 変化を起こすことについて
- ・変化を起こすと次の役員の負担になってしまう
- ・少しずつ変えていく
- ・成功体験の見える化
新しいことに取り組むのは楽しい、やる気が出る
一緒に取り組む仲間の大切さ
- 3 役員として住民と信頼関係を築くには
- ・真のニーズを把握するには、まずは信頼関係の構築から
- ・信頼関係を築くには・・・
真摯に取り組む
謙虚になる
「知らない」をわきまえる(わからないことは素直に聞く)

地区・町会での取組事例集

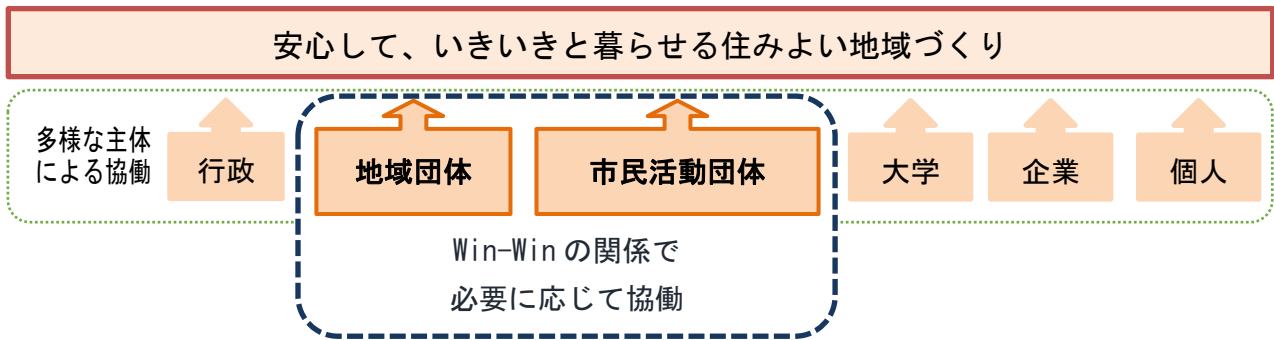
【事例１】ターゲットを絞った様々なイベントの開催（田川地区）	
背 景	・古くからの町会と宅地開発・マンション建築などで新しくできた町会が混在する地区であり、新しい住民や若い世代の参加が課題
取組概要	・若い女性対象のワイン講座、男の料理教室やそば打ちなど、幅広い層それぞれにターゲットを絞り、イベントを開催
成 果	・田川公民館で開催された「ワインと料理を楽しむ講座」をきっかけとして、20～70歳代の10人が「たがわぼんど AUBE（オーブ）」を結成した。 ・田川地区の住民バンドとして地区内外の行事で演奏活動を行っている他、ジュニアバンドも結成されるなど、地区行事の活性化や住民の交流促進につながっている。
ポイント	・イベントに参加して楽しむことをきっかけとして、新たなつながりや取組みが生まれている。

【事例２】VS 芳川マッチ（芳川地区）	
背 景	・地区が広く複数の小学校区に分かれていることから、学校間の子どもたちの交流が少なく、地区の一体感を高めるには学校間の子どもたちの交流の促進が課題
取組概要	・芳川地区に住むすべての児童が、学校や町会の枠を超えて集まり、親睦を深めることを目的に、レクリエーション大会を実施 ・レクリエーションの内容は、児童自身が子ども会議で企画し、中学校生徒もスタッフとして参加 ・まちづくり協議会青少年部会において、育成会長が中心となり、周囲の女性や学校の先生の協力も得ながら、子どもたちの自主性を上手く引き出すように取り組んでいる。
成 果	・普段顔を合わせる機会の少ない子どもたちが一堂に会して交流することにより、地区や町会など地域の一員であることを意識し、地域活動への積極的な参加につながっている。 ・子どものつながりが親のつながりに発展している。
ポイント	・子どもたちが地区の行事を企画する楽しさを体験することで、将来の担い手となることが期待される。 ・緩やかな協議体に学校や子ども会育成会が参画しており、町会役員との連携がスムーズ

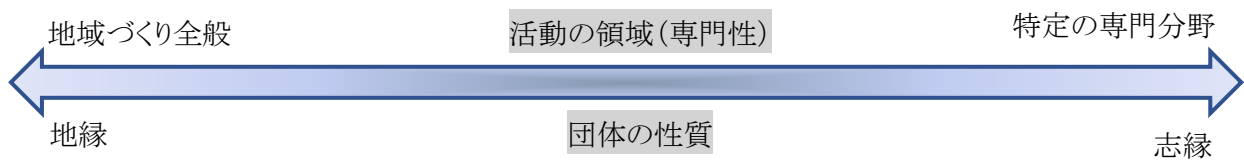
【事例３】漫画で地域の歴史を学ぶパンフレットなどの作成（第三地区）	
背景	・旧カタクラモールの再開発に伴い、まちづくりについて問題意識を持った住民有志がまちづくりアンケートを実施し、その延長として子どもたちに地区の歴史を伝えていく必要性を感じた。
取組概要	・現在のイオンモール松本の場所には、かつて大正時代に日本一の規模を誇った片倉組の製糸工場があった。その工場を経営し、松本市の近代産業発展に大きくかかわった今井五介の業績を漫画などで紹介するパンフレット「お蚕さまから生まれた街」や、地区の過去と現在を比較できるイラストマップを作成 ・作成したパンフレットとマップは、地区内の学校の地域学習や、まち歩きイベントなどで活用している。
成果	・幅広い世代の住民が自分たちの住む地区に興味を持ち、まちづくりを考えるきっかけとなった。
ポイント	・漫画やイラストを採用するなど「楽しさ」を意識した情報発信が、幅広い人々に興味を持ってもらうことにつながっている。 ・また、緩やかな協議体役員が地区住民の思いを受け止め、その活動を支援

【事例４】女性を町会役員に（四賀地区 七嵐町会）	
背景	・人口減少、少子高齢化による町会役員の担い手不足
取組概要	・副町会長に初めて女性を選任
成果	・女性の生活に根差したアイデアやネットワークにより、町会行事の活性化、参加者の増加につながった。
ポイント	・町会が新しい発想を持った人の意見を積極的に取り入れるとともに、活動しやすいようサポート

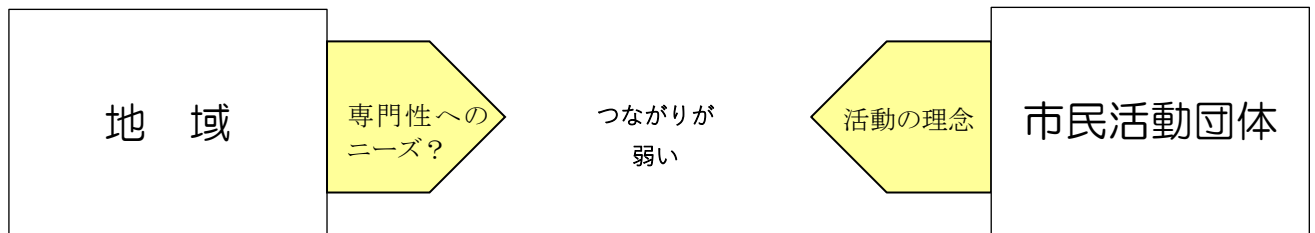
1 協働の目的



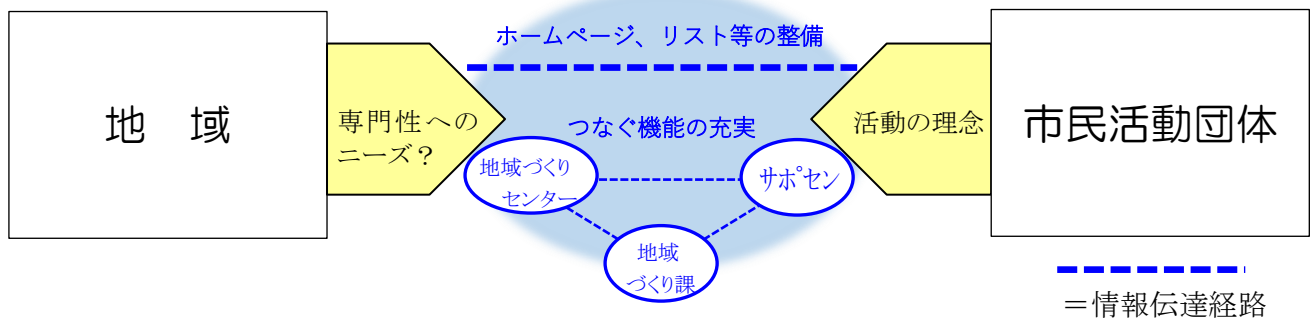
2 協働の現状と課題



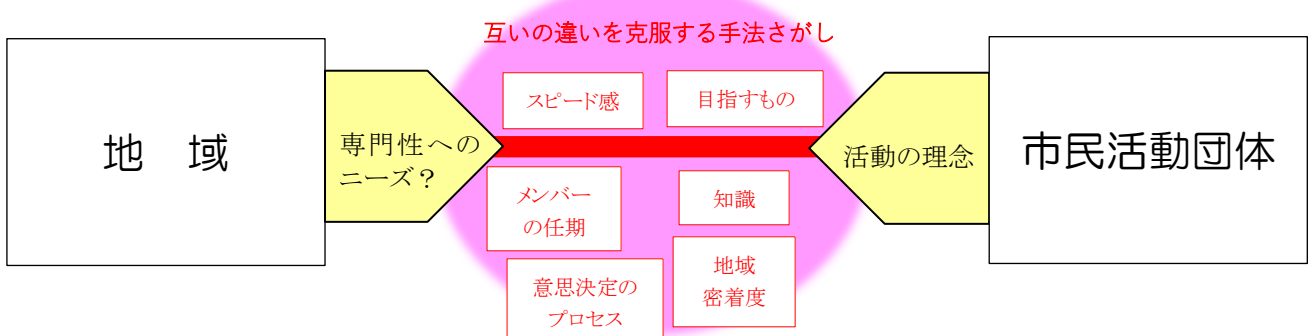
(1) 現在



(2) 必要なもの①「両者をつなぐ機能の充実」



(3) 必要なもの②「協働を実現する手法の確立」



第4期松本市地域づくり市民委員会活動経過

年度	開催日	回数 (第4期通算)	主な内容
H29 年度	H30. 2. 1	第 1 回	自己紹介、概要説明、活動方針
	H30. 3. 26	第 2 回	「地域づくり推進体制」について (ワールド・カフェによる意見交換)
H30 年度	H30. 5. 30	第 3 回	「地域づくり推進体制」について (グループ討議による具体的課題の確認)
	H30. 7. 13	第 4 回	課題確認、検討の進め方
	H30. 8. 20	第 5 回	「地域と市民活動団体の協働」について現状確認と 意見交換 「地域づくり推進体制」について課題の掘下げ(グ ループ討議)
	H30. 10. 26	第 6 回	「地域と市民活動団体の協働」について意見交換 「地域づくり推進体制」について課題の掘下げと解 決策の検討(グループ討議)
	H30. 12. 17	第 7 回	「地域と市民活動団体の協働」について論点整理 「地域づくり推進体制」について解決策の検討(グ ループ討議)
	H31. 3. 11	第 8 回	「地域と市民活動団体の協働」について市民活動推 進委員会との合同意見交換
R 元年度	R 元. 5. 23	第 9 回	「地域と市民活動団体の協働」について協働を進め るためのポイントの整理 「地域づくり推進体制」について解決策の検討(ロ ジックツリーの完成)
	R 元. 7. 25	第 10 回	「地域と市民活動団体の協働」についてレポート骨 子の検討 「地域づくり推進体制」について実践の掘り下げ
	R 元. 8. 26	第 11 回	「地域づくり推進体制」について地域づくりセンタ ー長からヒアリング
	R 元. 11. 28	第 12 回	第4期レポート案の検討
	R 2. 1. 27	第 13 回	第4期レポートの決定

第4期松本市地域づくり市民委員会委員名簿

(任期 平成30年2月1日 ～ 令和2年1月31日)

No	氏 名	選出分野	役職・職業等	備考
1	ほりうち まさお 堀内 正雄	地域づくり活動 関係者	松本市町会連合会会長	平成30年5月30日から
	ひらばやし ひろたか 平林 大喬			平成30年2月1日から平成30年5月29日まで
2	くさぶか くに 草深 邦子	地域づくり活動 関係者	松本市民生委員・児童委員協議会会長	
3	オオカド チエミ 大門 千恵美	地域づくり活動 関係者	松本市健康づくり推進員連合会会長	令和元年7月25日から
	きつぎ ゆみこ 木次 由美子			平成30年2月1日から令和元年7月24日まで
4	うすい かずお 臼井 和夫	地域づくり活動 関係者	松本市子ども会育成連合会会長	令和元年5月23日から
	みやばやし たかこ 宮林 孝子			平成30年2月1日から令和元年5月22日まで
5	いとう じゅんいち 伊藤 順一	地域づくり活動 関係者	松本市社会福祉協議会 地域福祉課 課長補佐	令和元年5月23日から
	ふるはた やすし 古幡 安志			平成30年2月1日から令和元年5月22日まで
6	おおさわ よいち 大澤 好市	地域づくり活動 関係者	元松本市町会連合会会長	
7	じんぼ たかひこ 神保 孝彦	社会教育活動 関係者	松本市町内公民館長会会長	平成30年7月13日から
	うばがい いさむ 姥貝 勇			平成30年2月1日から平成30年7月12日まで
8	ふりはた みやこ 降旗 都子	社会教育活動 関係者	第3地区公民館報編集委員会委員長	
9	さとう れいこ 佐藤 佳子	市民活動 関係者	松本市市民活動推進委員会	
10	くらさわ さとる 倉澤 聡	市民活動 関係者	都市計画家	
11	あかぬま るみこ 赤沼 留美子	市民活動 関係者	市民活動団体(松本わらべ館設立準備室代表)	
12	こんどう ひろし 近藤 博志	産業分野別 関係者	松本商工会議所・管理部部長	
13	まつざわ もとお 松澤 幹夫	産業分野別 関係者	JA松本ハイランド農業協同組合代表理事専務理事	
14	すみの そのえ 角野 園恵	有識者	松本市福祉ひろば関係者	
15	ひろせ ゆたか 廣瀬 豊	有識者	松本大学松商短期大学部准教授	
16	こばやし おきむ 小林 修	公募委員	公募委員	
17	みやした いく 宮下 鉄	公募委員	公募委員	

第4期松本市地域づくり市民委員会

委員長	廣瀬	豊
副委員長	堀内	正雄
委員	赤沼	留美子
	伊藤	順一
	臼井	和夫
	大門	千恵美
	大澤	好市
	草深	邦子
	倉澤	聡
	小林	修
	近藤	博志
	佐藤	佳子
	神保	孝彦
	角野	園恵
	降旗	都子
	松澤	幹夫
	宮下	鉄